

## 島本さんのこと

平田正代、2013年『追悼集 ありがとう 島本さん』pp.4-6

島本さんは沖縄群島政府文教部婦人課の指導主事をしていた一九五二年、米国民政府の国民指導員プログラムで、翁長君代先生と共に三ヶ月間米国各地を訪れ、女性団体等との交流を通して新しい女性像を心に焼き付けて帰沖された。

その後琉米文化会館で企画の仕事に携わり、持てる能力を存分に発揮して新しいアメリカ文化の普及、啓蒙で沖縄の戦後復興の一翼を担っておられた。その頃基地内の有志から沖縄の子どもたちにスカウト活動を紹介したいとの働きかけがあり、北中城中学校で教鞭をとっていた比嘉敏雄さんらの尽力で同校に初のガールスカウト団が誕生した。その後コザ中学校、真和志中学校、大道小学校等に広がり、一九五三年琉球ガールスカウトが結成された。公認化に向けて準備委員会が発足、その中に比嘉敏雄さんと島本さんが名を連ね翌年にはガールスカウト世界連盟よりガールスカウト沖縄連盟設立が正式に認可された。

私は、中学・高校時代に崇元寺の琉米文化会館によく出入りしていたので、こんな楽しい職場で働く女性はいいなと遠くから島本さんを見ていた。妹二人がガールスカウトに入り、母をはじめ家族も行事にかり出されるようになり、島本さんの存在を間近に見るようになった。颯爽とした身のこなしと説得力のある話し方は、新しい女性の体現そのものに映った。将来こんな女性になりたいとの憧れを禁じ得なかった。そしてガールスカウトと琉米文化会館の両方に島本さんから声をかけられるようになった。アメリカ留学に際しては島本さんはじめ先輩女性方に送別会をしていただいた。

復帰に伴い米国民政府広報局文化課に属する琉米文化会館はなくなり、副館長まで勤めた島本さんは琉球新報社に事業局部長待遇で迎えられた。「主婦の生活大学」をはじめ島本さんの企画が次々に大当たりとなっていた。そんな中沖縄のガールスカウトを設立当初から現場で担ってきた永田芳子支部長が一九七五年急逝した。その窮状を託され実質的に陰でガールスカウトを支えたのが島本さんであった。島本さんの意を受けて一年ほどの間に数回、日帰りで日本連盟の会議等に出席したものである。

一九八〇年の美さと児童園開園以来、同じ法人下にあった国際福祉相談所では所長空席の状態であった。折しも無国籍児問題がマスコミを賑わし国籍法改正の機運が盛り上がってきた時期で、対外的に対応できる所長が必要であったが、経済的事情もあり諦めムードに陥っていた。そんなある日新報社にいつものように島本さんを訪ね近況を報告、帰り際に「島本さんのような方に来ていただけるといいのですが、そうはいきませんからね」と言った。特別な意図は全くなかった。すると島本さんは「考えてみる」と言われたので、あわてて「現在の地位と給与を投げうつような仕事ではありませんから」と打ち消した。新報社事業局で最も仕事が充実した時期の方向転換、それも労多く実り少ない分野への転身は常識では考えられないことであった。しかしこのような経緯でこちらが戸惑っている間に、まるで瓢箪から駒のように一気に事が運んでいった。島本さんが迷うことなく即決即断されたとの印象を強く持っている。

一九八二年四月願っても叶わないような人材を国際福祉相談所の所長に迎えることができ

た。島本さんの第一声は「相談の現場はケースワーカーに任せる。所長の仕事はそれを支えること」で早速有言実行で動き出した。五月には県の婦人問題懇談会で無国籍児問題を取り上げてアピールした。相談所を財政的にバックアップするため国際福祉奉仕会を立ち上げ、島本さんの財産である膨大な人材ネットワークのおかげで多くの方々にご協力いただいた。テイクだけではだめとギブのプログラムを企画、基地内の提携機関や施設の見学会などを催し好評を博した。十一月には県内アーティストの協賛を得て美術品展示即売会をダイナハで開催するなど、資金造成を積極的に展開された。

島本さんのもたらしたもうひとつの効果は国際福祉相談所の働きを世間に知らしめたことである。パートの職員たちが国際結婚、離婚から生ずる国籍、戸籍の問題に取り組み、外国から出生証明書や離婚判決等書類の取り寄せ、翻訳など多岐にわたる業務をこなしていた。折しも識者やマスコミの間で盛り上がってきた無国籍児童の問題が、国連の女子差別撤廃条約批准の前提条件となる国籍法改正の方向へ大きなうねりとなって動き出していた。日本の女性たちが担ぎ出したみこしの中心は沖縄の無国籍児であり、島本さんの功績大である。国の国籍法改正中間試案への聴聞会が大阪法務局で開催され、一九八三年三月島本所長と筆者が出席し沖縄の実情を報告、父親だけでなく母親の国籍を継承させる必要性を訴えた。念願の改正国籍法は一九八五年一月一日施行され、早速当日日本国籍取得第一号が認められた。島本さんはそれを見届けて公的には国際福祉相談所を離れられた。

その後紆余曲折を経て一九九三年島本さんは社会福祉法人国際福祉会の理事長に就任、相談所の所長を兼務されることになった。その後同じ法人で第一種社会福祉事業の児童養護施設美

さと児童園と第二種の相談事業国際福祉相談所を両立させるだけの財政的基盤がないとして理事会は相談所の閉鎖を決議した。

戦後四〇年間一民間団体として必死に守ってきた国際相談事業は国籍法改正により大きな任務を終えたと言われ、また県の女性センターが相談室を開設するので相談者は困らないとの声もあった。しかし島本さんにとって国際福祉相談所の閉鎖は苦渋の決断であった。この間三年余の所長職の給与は全額相談所に寄付されたのだった。

その後島本さんは美さと児童園の支援を継続され、卒園生の進学、就職準備資金集め、卒園前に運転免許を取らせるための資金作りなど物心両面から子どもたちを支え続けた。卒園式やもちつき大会にできるだけ顔を出されて、子どもたちの成長を楽しみにしておられた。

島本さんは戦後の自立した女性としてその行動でわれわれに範を示された。

# 座談会 沖縄と戦後70年 沖縄から女性の人権と平和を考える

平田正代、2015年『女性展望』（9-10月号）pp.9-14

特集  
沖縄と戦後70年  
座談会

## 沖縄から女性の人権と平和を考える

沖縄戦終結、そして戦後から70年、日本全土の米軍基地の7割が配備され築けてきた沖縄社会と女性とはどのような位置に置かれ、困難を乗り越え拓いて来たか。様々な分野で運動を引っ張ってきた人々を通して、女性の人権や平和の問題を考える。

安次 義典 子（こうじよき ことみ）  
重 藤 純 代（しげふじ じゆん じゆん）  
平田 正 代（ひらた まさよ）  
山城 紀 子（やましろ きこ）

### それぞれにこの戦後70年の出来

**山城** 今日、女の視点で沖縄の戦後70年を話し合いたい。私は40年以上前に沖縄へ入った。記者にならず、写真、上には「うちの婦人記者のり」と紹介されたことが多かった。「婦人」がものすごく重荷だった。当時女は未婚の記者で、沖縄の重要なことである沖縄、基地問題、経済、文化などは担当する機会すらなかった。そのように扱われて初めて女の苦みを感じた。そこにそれを差別だと感じてるのは当然の私（女）だ。だが、周囲の人たちは普通の人風であり、社会の中で主

役は男であることを痛感した。一方、婦人担当の尻尾として子育てや嫁が旦那、嫁が旦那の世話、あるいは外産などの取柄をしていく中で、女の生き方に関心を持った。スプレッドを染みない、それでも明日の戦後70年を後日、日々書き、時としてひどく困難に向き合うがくしりわけにはいかない。女なら日常に根付いた価値観や地道な頑張りや社会を支えたいと思った。

**安次 純** 私は勉強が好きではなかった。教師だけはやるまじいと思った。ところが女学生卒業後、教員採用試験を勧められ、受けたら、受かてしまった。旦那教育事務所から補欠教員の誘いがあり

中学校、そこで子どもだった縁してふふ、自分の難関をどうで闘っているのかわからなかった。それは自分していることに子どもなら義務が明るくなく、教員もまよもよと難し職業ではない（笑）。その手続書を続けた。

しかし当時はものすばらしい情実な事が行われ、補欠教員は得難く、ついに抱え捨てられた時代だった。登載制度（合格原簿の名簿）もくまぐまより後交差生が採用されいく。この不合理的な難しと難事教員部をつくる活動をして、闘ってきた後はそのまま教員組合に入った。組合では子どもも労働権に関わる問題や女性の権利獲得、女子教育問題等に

取組んできた。平田 上京し、大学で、20歳の時に60年安保があった。それまで女となく混れて来た。住居だったが、初めて自分はこれだけのことが止まらざるを得ない。沖縄というふうに関わりを持っていくかを考えた。沖縄の学生は青島会から送り出されたが、親戚、青島会から学費などは参加しないようにとの指示が来た。知らず。しかし自分自身に行くべきだと初めて自分で考えた。この60年安保を難関とて自分がの起点になった。



平田正代氏  
卒業して沖縄に帰つてきた。英文科を出ているので、米留（米陸軍省がかりな資金を活用して米留した米留留置区）がある。仲間からの勧めもあり、それも悪くならぬと思った。当時「日」(休日)など時節全盛時代で、アメリカを

見るからに（笑）。選挙する時、専攻はつまり社会福祉に決めた。別居後は国際福祉相談所から誘いがあり、もう1年ケケスルーカーにされた。

**高 麗** 私は中学年の世に沖縄にガリガリができた。姿ではものすばらしい抵抗的な娘なのだ。ガリガリの抵抗性でも楽しんだ。キリスト教短大卒業後は東京のキリスト教に編入する予定だったが、沖縄の養育委員が養育金を送れなくなり、フリーランスの大学にうつることになった。



高麗純氏  
当時フリーランスの関交は断絶し、日本が労働者として働くことが投げられ、映画館では歌の場内になら「日本」ともわき、顔が凶悪な時代だった。親友の家で戦争体験の話を聞くと、家族が日本に殺されたと言われていた。それなりの気持ちになったが、

「沖縄は日本ではないから」と言われた。また東京最大の米海軍基地があるオコチガボから来ていた。自分の家も助けたが、沖縄に居てみたかと思はれ、その答も聞いていた。

**山城** それらの縁が重なり、戦争と基地、そして女性の問題を意識させてくれた。高 麗 そうだね。戻りからは沖縄の女たちのことがなになり、芽生え問題の質的転換や、教育関係の宗派を超えた勉強会、外脚米子えん（沖縄戦後史研究家）と、本十復帰前の岩代、沖縄に戦争防止法がなかなかできないうつことでまず山田枝さんら衆参女性議員の視察団に参加。その後私は高麗喜久江さん（日本キリスト教婦人矯風会）を案内して立法院議員を助けたこともある。

この後家族の世帯で上京した。76年、前年メキシコで開かれた世界女性会議に関すること。来日した。彼女が、バネリートの一人、新婦の婦人相談員兼志士相子さんと発言に感動した。あんなような

業は盛況だがどうとどうよかと聞くと、東京都立社会事業学校で学んだと言われ、幸い入試に間に合、時間差で即手続きを、翌年卒業した。妻はその時夫は結婚した。東京神学大で進るととなり、「任事な、私が働くよ」と言ってきた。私も学校へ行くことになった（笑）。

当時東京は異議発表さんが知見せず、後継子きや、働口悪くさんなながらも、既成の福地をやるように要求していた。私は社会事業学女大生時に、と、若者でも女性商店で質問をする。心を込めに、たまたま後期の生徒会長には、たまたま、理系、東京都の女性センターが全国初、電話相談を設け、その中に採用された。そこで4年働き、夫も就職になったので沖縄に引っ越すことになった。

**山城** それぞれのウツボ（ウツボ）がわかって興味深。今の話とも通じ、私が、私が新聞社に入った時、女性たちは女性の視点を保持して来たかと思う。例え「8国際婦人」女性地位向上を

め、と、どうこう来日を取材に行く。と、どうこうをを見せるから、妻、母も、と、とが脚配の調子が多かった。しかし70年の国際婦人年、その後、国際婦人の10年、国連の中で、沖縄の女たちは本土と世界女たちの運動の呼吸しながらよく変わっていった。

私自身も、男と対等の記者、男並みに強くなる記者になんか、という思いが、女性たちを尊重する中で、目指すのは男ではなく、男の目につくられる社会を、直すことと考えるようになった。女の視点を弄りながら女の記者として存在しようと思った。

### 米軍基地の震害

**高 麗** 基地軍隊を許さず女たちの名簿に書き「軍艦」を入れたのは理由がある。沖縄の基地問題には50年代、60年代、弾劾的に奪われた。50年代、60年、すずとしよう。それから、問なく続いている事故、事件がある。各自自治体への基地対策推進に

は、何年何月にシフト機が落ちたという記録は全部ある。

ところが米兵が自由な時間に基地の外にシフトをしたり、あるいは結婚したりと夜を消したということについては、地位協定の中でも公務中の事故事件扱いはなく、沖繩にも数万数千人の米兵はアメリカで徴兵され、組織上派遣されて来てもどこかかわりなく、女性に対する犯罪などは限りなく個人の犯罪として処理される。実際に被害を受けた人が声を上げられる社会なら知らず、また日本も認めた駐留軍の中で起きているのに社会的問題のように差別扱われている。

95年の米兵少女暴行事件後、改めて私には被害者を作らなくて声を上げた人だけで声を上げるのがよくなかった。声を上げない。例えば米兵との間に子どもが生まれ、母親だけのまま沖繩で育てようと思えば普通には沖繩の、日本の常識。しかし深い意識の中では誰か父親からいうことがわからなくて妊娠をするのはとても肩身の狭い恥ずかし

いよびだと思わぬ。それは誰の子であるかは関係ない、私の子だ。と言えるような社会ではないから。沖繩戦が終わって1年以上以内にたくさん子どもが生まれたというデータもある。

亮春をするようになった女性たちの口グズを見ると、貧困やレイプの被害に遭ったり、レイプによって子どもが生まれたため子どもを預けて亮春をしたり、女性の側が責められることは何もないのに社会的にはそういう位置に置かれていた。これが米軍の駐留によって沖繩の通ってきた現実だ。もし沖繩が暴力、人権被害に遭ったか一人残らず声を上げ得る社会だったら、米軍はこれ以上長く駐留できなかっただろう。

**山城** 被害の実態はあつたのに表面はあつたかも知らなかったかのようにはされてきた。それが国際婦人年以降、女性に関わる問題に向き合つて世界会議を重ね、95年北京の第4回世界女性会議ではまさに性暴力がテーマになった。

**高里** 沖繩の団体は本土復帰後に系列化していたが、女性は国内

の系列化ではなく、わりと国際的な動きになつてきた。

**山城** もし女たちがこころま変わりなかつたら、95年の事件もなかったことになってしまっただろう。女子差別撤廃条約の批准が問題になった時、日本政府は時間尚早だから見送ろうとしていたが、市川房枝さんたちがこの時期を選したら日本の女性の差別されは状況は変わらない運動をした。そうなるべく前からかになつたのが又系優先の日本の国憲法の問題だ。



山城宇子氏

沖繩の女と米兵の結婚、離婚など様々なトピックに関わってきた平田さんはこの間を振り返つてどう思うか。

**平田** 戦争直後まず女性が直面したのは経済的貧困の問題だ。夫が肺病や栄養失調で戦地から帰つてきて、ベリンを買つたために妻が外に出て亮春をするというよう

なこともあった。男性9人に対し女性10人という終戦直後の状況を、女性はいろいろな意味で底辺を這いずり回り、己を犠牲にして沖繩の戦後を生き延びた。

その中に米兵からシフトもあつた。生活のためには米軍基地しか仕事がないのでメイドや洗濯女になり、その中で人間関係が生まれきてたり、あるいは強制的に妊娠させられたりということも起つた。沖繩は戦前か女性蔑視が根強く、何かあれば女が悪いという考え方がずつとあつた。それが混血児を産んだ女はより低いレベルの階層の女だとか、いわゆるスベスベ、ハニ、オマリというように国際結婚に対する見方にみえていた。沖繩の男性たちからしたら、妻が女好きの女性ばかりアメリカ人のほうになびいていってしまうように見え、反感もあつた。

**山城** 混血児を産んだ母親たちは孤児院に入ったのではない。

**平田** 混血児を産んだから捨てたとか、養子に出したとかいうことは、みんなが考えているより意外に少ない。産んでから、働くため

に子どもを養育の母親の所に送つていた。宮古や久米島にころころ調査に行つたことがあるが、混血児の子どもたちはおぼあきんが抱えて一生懸命育てていた。悪口を言われたり、子ども同士で何かあつたらうが、その子どもたちが親や祖父母から疎離にされたというところは、沖繩ではないと思う。

**山城** 社会問題になる以前から無国籍児の相談はあつたのか。

**平田** あつたが、アメリカ側にかけることも日本側にかけることも自分だとなんか、法務局は何もできないと言われ続けた。それで79年の国際児童年に、無国籍児の相談が60件あるということを発表した。

### 戦争と性暴力

**平田** 米軍がベトナム戦争他、世界各地で戦争を抱えていた時、兵士は心が荒れ、沖繩の女性に酷い暴力を振るつた。結婚していても裸にされて夜中に追い出されるなどのDVがあつて、産後でもいろいろいいから電話してと、名刺に自宅

の番号を書いて渡すこともあつた。私は傷害事件最初の通訳もしていたが、凶悪事件も多く、米兵の荒れた心が家庭内にも影響していると感じた。

**重里** ベトナム戦争の時期、55年から75年までの10年間に沖繩では毎年1〜4人の女性が殺害された。私が婦人相談員の時に会つた女性たちはみな共通して殺め殺されそうになつたと言つていて、「一着にいてる時に突然、あるいは夜で入つて来る突然、トノシに行つたら誰かが追いかけてきて殺め殺されそうになつた。戦場で丸死に一生を得て遺手納基地に帰つてくる兵士たちが、パンツと夜着だけ裸り出し、戦場の狂気を女性たちに吐き出していたのだ。

**山城** 戦争に行つた男たちが精神を病み、そのことで目の前の弱いなちに暴力を振るうということが広く理解されるようになってきた。戦争から帰つて来た夫がDV夫になつているという映画も作られている。沖繩社会のDV発生件数の多さは沖繩戦があつたこととつながっているのではない。



安中幸子氏

**安中幸子** 私が生まれ育つた中部の宜野湾市は米兵が多く住み、米兵のレイプ事件もあつた。レイプを

されたら恥だと思つて根底には女性蔑視がある。だからレイプされたことを口外しない。近所に妊娠させられた女性がいれば、どこかほかの土地に行つた。あそこのお姉さんは乱暴されたのに、どうして大人たちは何も怒らないのかと、親に食つかかかつたこともある。ベトナム戦争で心が荒んでいるのが、子どもの目の前に二を露出させて赤き回る米兵に出会つた。

**山城** 戦争に行つた男たちが精神を病み、そのことで目の前の弱いなちに暴力を振るうということが広く理解されるようになってきた。戦争から帰つて来た夫がDV夫になつているという映画も作られている。沖繩社会のDV発生件数の多さは沖繩戦があつたこととつながっているのではない。

### 皇民化教育を担つた教師たちの戦後と教育のいま

**山城** とうとう98年戦争を止めた生活実態調査によると、女学校卒の女性は10%余りしかいなかった。その中で様々な分野で立ち

上がったのが元教師だが、そこに共通していたのがかつて軍国教育を担つたという、強烈な信念だ。安中幸子さんはそういう先輩たちをどう見ている。

**安中幸子** まず、教師になつて先輩たちの戦争体験に胸を打たれた。皇民化教育を担つてしまつたというしく罪感、強烈な反省のもとに「教子を再び戦場に送るな」というスローガンが生まれ、それは今も伝承されている。上江洲トシさん(初めての女性県議や平敷りつ子さん(元沖縄婦人部長)など、戦後の沖繩社会をリードしてきた女性たちのほとんどが、教師をしなから、なほ心な教育目標を向けなかつたのか。国教を見抜けなかつたのは、男任せであつたこと。一人前人間として社会に目を開き、生きるとは、政治は何かということを実際に考えなかつたからだと、重里さん、私ならも自覚してつた。

もう一つ、教師側立上げの女子教育問題研究会で女子の労働教育に取り組むが、当時調査した28歳止まりの人生設計(当

時の結婚適齢期。23歳後は夫に任  
めの人(三)が教育を今もまっすぐ  
まきいる。どうせ就職しても非正  
規なのだから、玉の肌を見て  
結婚して、子どもを育て生きる  
以外に道はないのではないかと、  
働から逃げてしまへ、塾もできる  
ような政策が取られている。

差別問題に徹底的に取り組み  
ていると思われている沖縄でも、女  
性差別につながることは無い。  
それは、幼稚園に入った時から男  
女に分けられ、いじめも男が先だと  
いう男女別名簿が当たり前になら  
せているとの影響が大きいのではな  
いか。それについても言及するもの  
なら「別に差別はしていませんよ」  
と返す。他県、外国は50音順  
アルファベット順だ。混合名簿実施  
率は中部連府県でも沖縄が突出し  
て低。なすが、それは、性別だ  
と管理し易く便利だからという。

女差別撤廃条約条項の卒業  
では「性に基づく区別は差別に  
属しない」となっている。ICBETの認  
識も含め、性で分ける名簿は性別  
役割分類固定化にもなる。

### 戦後70年、語り始めた人々

**山城** 戦後70年、安保法制法案  
の行方が気になる。県民が嫌だと  
言うところにもスプレイが強制配  
備され、辺野古に新基地が造られ  
ようとしている。この状況で思う  
ことは何か。

**平田** 60年安保を体験して、い  
くら私たちが反対しても変わらない、  
決まってしまうのではないかと  
いう強い絶望感がある。しかし  
今は沖縄でもこれだけの運動  
が広がり、メディアでもかなり取り  
上げられて来ているので、変わら  
ないとは思って、変わっていくだろ  
うという希望は持っている。

**高里** 最近、戦争に行きたくな  
いという若者の発言に対して自  
民党の若手議員が利己的だと言  
ったが、自分も憲法の下で生きて  
きたのではないかと問いたくな  
うな、超全体主義的な考えだ。  
安倍さんは聞き直して、言いたい  
放題だ。

今沖縄で何が起ったかとい  
うと、95年から20年間「1」と言  
い続けてきたことが、だんだん大き

な力にまとまって来たのだ。辺  
野古の集会に行っても、リリーが  
順番に話すのではなく、一人ひと  
りが発言をしている。75歳男性  
は、自分よりかなり年上だが戦  
場から帰って来てもぬけの殻のよう  
になり、周囲が慰み言葉よそな  
生を送ったと話した。ところが飲  
み替ると、生き延びるために敵  
友の体たわいのウソを真実だとい  
話から始め、その嘘を指摘して  
たことを悔い、自分が生き延びて  
きたことを悔い、だから酒を飲む  
と言ふという。



今まで一人で発言したことが  
なかったのに、恐る恐る手を挙げて  
話す人もいる。自分の戦争体験  
を声に出し始めた人々に触れさ  
れ、何日か前から来て黙って聞  
いた人が話すようになる。絶対70  
年前に戻りたくない、この絶望が  
社会、政治を委ねよう力だ。

**安次謙** 今、辺野古には、70代や  
80代の皆さんが自分たちが元氣な  
うちに、またあの時代が来るのか  
と思うと、死ぬに死ねないとい  
う必死の思いで来ている。しかし最  
近の集会の有り様を見ると、労働  
組合の衰退を感じる。やはり組合  
が強くなると世の中は変えら  
れないと思う。



上: 辺野古の新基地建設に反対する市民の集いは大きく広が  
る。下: 辺野古の集いで語る元自衛隊員、下: 琉球労働組合の  
の誕生。自衛隊員らも参加して語る元自衛隊員ら、下: 琉球労働組合の  
入り。集いはより一層一層に集まる人々

先生と平田さんから60年安保の  
その話があったが、先日大学で  
教える女性が反戦のウツキウ  
を唱え、ウツキウを着ていたら「元  
生、大丈夫なの?」と学生に言わ  
れなされた。別の全職員も「1  
辺野古」とか「NO WAR」と書か  
れ、ウツキウを着ていたら、同じよ  
うなことを言われたという。それ  
を聞か、教師たちが何らかの行動  
を自己規制していることと学生が  
言葉でつづつ、まれに気配けした。  
しかし最近、県内でも国会周辺で  
もウツキウを穿けるようになって  
来た。うれしいことだ。

**高里** もうひと言、自民党の女  
性問題では、女性でありながらメ  
ンタリイはまさに男の現存だ。70  
年前から認識していらるやうな  
たはかなのに、その時々、国の大  
きな立派で、格差解消に広がっ  
ている。女性の自衛隊員を期す  
こと、認識しているやうなの、目  
を離さない。

**山城** 性暴力という概念が認知  
されるようになり、戦争が起ると  
女子もことごとく起ると、これも  
具体的にわかるようになった。女

性が女性の視点で沖縄戦や基地  
軍隊をとらえ直し、歴史を語つて  
主体的に反戦、基地撤去を訴えて  
いることが、必ず大きな力となる  
と思う。

(注: 8-5 格差解消会館 / 那覇市)

**安次謙** 藤子(あなみ、あな)  
30年間勤務に勤務、「女子教育」な  
どに語り継ぐ。沖縄労働組合委員長  
を経て退職。現在はエネルギー問題  
を考える会代表。

**高里** 鏡代(たかざと、ますみ)

基地・軍隊を許さないと闘う女  
たちの会共同代表。琉球労働組合  
タタキ実行部、東京都女性議員会  
タタキ実行部、那覇市労働組合を  
経てり、89年から那覇市議(4期)。

**平田** 庄代(ひらた、まほみ)

20代後半から約30年にわたり国際  
福祉センターとして、米軍基地  
のあり方を、住み込みの労働者  
結婚、子どもの戸籍、養育問題など  
を抱える女性に闘ってきた。

**山城** 紀子(やましろ、のりこ)

沖縄タイムスに30年記者職で働  
務。その際「1」で、労働に「人を  
不幸にしない医療(30歳現代文庫)  
「女性問題」の闘いやわらぬ女社会  
に作り「(1)」(1)」など。

## 平田正代氏を囲んで（沖縄女性財団スタッフを対象とした講話）

平田正代、2021年11月16日、「ているる」（那覇市西）

### 1. 国際福祉相談所の歴史的経緯と相談内容

私は、1998年の4月1日からこちらに参りまして、2006年の3月までおりました。その間、いろんな人が出たり入ったり、割合長かったんですけど、ちょうどこちらにも身を引こうかと思う時にまた英語のできる人が辞めたりして、なかなか調整取りにくくてやりました。

なぜこちらに来たかと言いますと、まず、国際福祉相談所というところは、最初1958年に設立されて、その時は任意の社会福祉団体ということで、琉球政府の許可をもらって設立されましたが、国際福祉事業団沖縄代表部という名称でした。それは国際福祉というISS。今でも軍の放送などでは、募金の季節になると、どこに募金したいかということで出るのに、ISSというのは出て参りますが。International Social Service（国際福祉事業団）で、国連の外郭機関でスイスに本部があり、主な国、代表部を置いているのですね。一国一代表部、日本にはもちろん日本代表部というものがありまして、沖縄はその時、米軍の施政権下でしたので、こちらには、アメリカ代表部の下部組織のような形で、国際福祉事業団沖縄代表部という名称で発足致しました。

なぜそれができたかという、基地に家族が駐留してきて養子縁組とかいろいろな問題が出てきて。沖縄に来ると、当時のアメリカ人の今でもありますが、貧しい国に行ってその子どもを拾って養子にしようと、簡単に養子縁組ができるような感じで来る人が当時はとても多かった。向こうは善意で助けてあげようと。ハーフの子どもが夕方外で子ども達が遊んでますよね。そうすると、私の知ってる人なんか

は、アメリカ人の感覚で、この子達は面倒見られないで、ネグレクトされてほったらかされてるというふうに感じて、かわいい女の子の後ついて行ってお家まで来て、お母さんにこの子もらえないかって聞いたそうです。だから、そういうふうな感じで簡単に混血児が戦争の後沢山いて、その子たちが大事にされてなくて、自分たちが拾ってあげようというような感覚は最初はあったと思います。

ただ、混血児はやっぱり中部にいくと結構いたんですけど、目につきましたけれども、orphanage、いわゆる孤児院というのは沖縄にはないんですよね。児童園みたいなのがあって、その辺が児童園と孤児院の違いがアメリカ人に非常に分かりにくい。私達が説明するときに、日本には戸籍とか、それから、お位牌とかお墓とかというのがあって、たとえ両親がいなくても親戚が面倒を見る、そしてお墓や家系、トートメーを守るように。特に男の子はそういう意味で育てられるとかいうことを説明したりしていました。

いずれにしても、1958年に設立されて、任意の団体だったんですが、復帰にあたって、沖縄代表部がなくなる、復帰すると日本代表部があるから当然沖縄はなくなるということで、基地はあるのにこれがなくなったら困るというようなことで、アメリカが援助して作ってたような。アメリカの教会とか婦人団体が寄付を集めて、国際福祉を援助してました。復帰の時点でアメリカの軍の将校夫人クラブ、将校の奥さん達がお金を出し合って、宜野湾市喜友名の土地・建物を購入して、そこに新しく社会福祉法人として国際相談所ができたんです。で、そこで相談

を受けてました。最初作ったときには、アメリカの考えとしては、養子縁組にはいろいろ難しい手続きが必要なので、そういうのができるシステムを作っておかないと、勝手に皆子ども達をアメリカに連れて行ってビザの問題とかが起るので、アメリカの水準に合う機関が必要だということで国際福祉相談所ができたんです。

ところが、開けてみると、子どもをアメリカにあげたいとか、そういう人が来るわけじゃなくて、娘がアメリカ人と結婚したい、あるいはうちから出てもう戻ってこないでアメリカに行ったらいいけど、どうしたんだろうとか、それから夫がもういつの間にかいなくなってしまって困ってるとか、そういう個人の問題や家庭の問題が沢山きて、それで、内容がだんだん養子縁組機関というよりは福祉事務所的になっていきました。当時は全部事務的にはアメリカの下部組織ですので、アメリカから事務局長が送られてきて、この人がスーパーバイザーの役目も果たす、全部見ていて、この人の給料もちろんアメリカが払ってたわけです。そのため下で働いている人達、ケースワーカー、或いは、皆の英語が出来ないといけないということで、一応日米両語でいろんなものを作成して、ケース記録も内容は日本語で、メモですから書いたりしていました。毎月理事会が開かれて、ひと月に一回。とっても頻度多いですよ、日本に比べると。そこにケース何件どういう内容で、それからどのような解決方法を探ってるかとか、会計報告も毎月出してそれも日米両語でやるもんですから、とっても事務的にも大変でした。

当時の分類の一番最初に出てきたのがアメリカの福祉事務所のケース分類で、特にこの国際福祉とISSというところの一番最初に「離散家族の再会 (family reunion)」というのがありました。なぜそういうふうになっているかとい

うと、ISSができた時に、当時第一次世界大戦の終わった頃で、世界各国にそれまでは戦争でもなんでも自分の国内、あるいは自分の周囲、狭い範囲で人が動いてたわけですが、産業革命があったり、その後のことですから、交通からいろいろな工事とか石炭とかいろんな工業や商業が発達して、人が国外で働くような状況、特にヨーロッパは地続きですから、そういう状況にあった時に家族、夫がどっかの国に働きに行ったけど、後は行方不明になって連絡が取れないというような問題がすごく起こってきて、その度に各国でこれはもう協力しないといけないという、そのニードからISSができてます。ですから、family reunionというのが一番最初の分類の筆頭に載っていました。

沖縄ではそういうのは必要ないので、私達が扱ったものと言えば、養子縁組の相談もありますし、それから養子縁組は、子どもを事故やなんかで子どもが生まれたけど、自分で育てられないふうなreferral（編集注：関係機関との連携）ですね。それから、開業医の産婦人科の先生方から今子どもが生まれそうだけど、母親の話を聞くと自分で育てられないって困ってるので、そういうのがよくあったんです。復帰の前は結構この辺の産婦人科、波之上にありましたけど、そこの先生もよく紹介して下さっていました。

それから、その後になりますと、人探し、初めは子どもが娘がアメリカ人と結婚して、その時は怒って縁を切るって言って絶対帰ってくるなって言われて、そしたら、子どもはその通りそうだと思うっていなくなるんですよ。やっぱり親としては今どこにいるか知りたいとかって、そうするといろいろ手紙とかなんでもあつたら持ってきてもらって、これを読むのがすごく大変でしたね。結構喧嘩したら物を投げて割ったりなんかする場合もあるんですが、私達は夫婦

問題で来た人達には器物を壊してもいいけど、ペーパーは絶対どんな物かわからなくても、手元を取っておくようにということを非常に強く言ってます。指導してきました。そんなのが鞆にいっぱいあると一つ一つ見て、何が必要か必要じゃないか見るのが大変ですね。そうやって手掛かり、いなくなった人の手掛かりをそうやって探してそこに手紙を書くというような方法で、必ずしもいるとは思えないのは明らかに自分たちが見てもまだそこにいるとは思えないんですけど、アメリカには住民登録制度がない、戸籍がないですから、人をたどりようがないんです。それで、元のあれに出すわけですね。それで離婚するにも夫が行方不明だから20年行方不明だからって離婚にはならない、自動的に何もならないのでやっぱり手続きしないといけない、その時は行方不明なら行方不明という証明を出さないと行方不明にならないですよ。その為にあらゆる住所とかなんか手掛かりを集めて、そこに徹底的に手紙を書いて、どうせ戻ってくるのは返事が来ないんですけど、その実績をあれして、この六カ所に書きましたけど、戻ってきません、これが行方不明の証拠っていうふうにやったわけですから、それ以外に方法がないので、それから昔の10年前の電話番号がある、そこに掛けてもいないわけですけど、いないのも大体わかってるんですが、KDDに行って当時のそっからオペレーターを通して個人から個人への番号から番号への電話じゃなくて、この番号の何々さん、ミスタージョンソンとかに掛けたいって言ってオペレーターを通す。そうすると、そこにいた人が「そういう人がいません。知りません」って言うんです。その日時を私達が、「何月何日、KDDのオペレーター誰々さんのあれでこういうふうに電話したけど、こういうふうな返事でした」と、行方不明の証明の一つになる。こんなのを集めて、それから、家庭

裁判所に持っていくというような方法を取ってましたので、とにかく書類はとても大切だと。

## 2. 国際相談所と米軍基地との関係

その後になりますと、アメリカで離婚して帰ってくる人とか、こちらでも離婚する人がやや増えてきたんですね。最初の内は、金持ちの人と結婚したからどんなに苦しくてもそれに我慢して軍に入る、IDカードさえ持っていれば、家族として、そしたらまだ沖縄では買えなかったような肉やソーセージが買える、軍のレストランに行ってステーキが食べられるとかですね。そういう利点があるわけですね。お酒、ウィスキーなんか買ってきてあげると、このIDカードを持っているということはこの人にとってはすごく利点なわけですね。だから、DVを受けても、このIDカードを失いたくないって、結構そういう感じの人いました。ですから、男性側からは新しい女性が見つかったから離婚、もう愛してないからって離婚の原因になるんですね。日本で考えられないでしょ？ もう愛してないからって、そんなことどこに聞いても、そんなことは問題にしないわけですけど、アメリカではそれがもう彼女は愛してない、他の人を愛してるからって、これで離婚とかっていうことになって、それで相談に来たりして。そういう時にはアメリカ式のケースワークということを最初やっていたもんですから、アメリカ側にすれば自分達と同じような相談所であるっていうふうに理解されるわけですね。理解されなくても、沖縄で連絡を取りたいって時にはここ以外に書くところがないわけですよ。ですから、アメリカ側からすれば、沖縄における国際相談の唯一のコンタクトできる場所っていうふうになって、軍の基地内からもチャプレン（編集注：牧師）の事務所とかファミリーサービスとか、いろいろ、後でできたんですけどね。そういう



ところからも自分達と同じような立場の同等の話し相手、協力できる組織であるというふうに認められて、一緒にいろんなこと、研修会をやったり、アメリカのチャプレンとか、それから若い兵隊のための結婚講座を手伝ったり、いろんなことをやりました。向こうとの相談で。また、軍も外に協力を認める時に、軍は空軍と海兵隊で全然違うんですね、態度が。空軍は今もそうですけど、例えば、デモがあって外に出られなくても全然困らないわけですよ。飛行機でアメリカから物取ってきて、人もいるから。空軍はだからあんまり沖縄をローカルな人達を必要としないってというような感じであんまり向こうから協力要請も来ないし。なんか悪いことしたら、あ、海兵隊だろう、マリンだろうって向こう人は言うわけです。

空軍の方はいろんな階級があって、階級っていうか、職種がいっぱい、飛行機の整備工とかいろいろ技術を持った人達とかいろんなのがあるわけですね。ところが、海兵隊というのは新卒の将校でも若い将校がいたり、50人とか100人とかって一般兵がいっぱいいるわけです。だから、その辺の違いもあるんだと思いますが、それと、海兵隊は軍の中で一番若い、若いっていうか、後に出来たものですよ。ですから、いわゆる戦ったりする一般兵は海兵隊なんですけど、そこで海兵隊の人に問題が起こったりすると、チャプレンもそうですし、それから医者、なぜか知らないですけど、navy hospital、皆海軍病院になってるんですよ。たぶん戦争中も海軍が大きな力を持っていて、そこで兵隊医者（編集注：軍医のことと思われる）とか、それから軍の法務官、弁護士の資格を持った人、そういう人達はチャプレンも大学とかそれ以上の教育を受けた人達は皆海軍だったんです。海軍から海兵隊に派遣されてそういう専門職をやるってというような、だからそういう意味でも空

軍と海軍との違いっていうのがあって、お互いあんまり上手くいかないこともあったようですが。海兵隊はですから、若い兵隊が沢山集めてるので、問題が起こりがちですよ。確かに空軍の人が言うように新聞に載るとマリンに違いないって皆言う。だいたいそういう傾向はあったんですけど。軍のチャプレンは各連隊に各部隊に配置されるんですけど、それでも間に合わないくらい相談がおうちの相談とかいろいろあって来るもんですから。特に、沖縄の女の人の問題とか、結婚したいっていう時一応軍の許可を得ないといけないので、それをサインする前にちゃんと結婚について正しく理解しているかどうかという問題。そういう時に問題があるという人達を私達のところに相談に行っても良いかどうかというのを送り込んだり、あるいは呼ばれて、国際結婚のカップルが来てるけど、来て一緒にやってもらえるかっていうふうに。

そうすると、国際結婚のカップルが来て、アメリカ人のケースワーカーと沖縄の人のケースワーカーがいたら、ここでお互いに通訳、言葉の通訳それから、価値観の通訳、文化の通訳、文化が違うために喧嘩にならなくていいこと喧嘩してるような場合もありますからね。そういうものもそこで解きほぐしていくと、この両方の両側のケースワーカーと国際結婚のカップルの面接は非常に効果的だと私は思いました。その場で皆が分かってくれる。アメリカ人、日本側のこういうところに相談に来ていいよって来ないですよ。どうせ女の方の味方をするだろうって。こっちから見ても、アメリカ軍の中に行ったらやっぱり、一人じゃ心細いですからね。だから、そこに人がいることがとても大切なことだと思って、なんかの時お互いに呼んで、向こうが来るのがなくても派遣して私達の事務所に来てたりしてたんですけど。そういうふう

に海兵隊とはいいい関係で、いろいろなことを一緒にやったり、向こうから本部の方からいろいろもう指導とかなんかで大学の先生とかが来たりすると私達も呼んで良かったら一緒に聞きましょうっていうような、声を掛けてくれたり、対等に扱って下さいました。向こうの方は教育のレベルが高いし、大学院は絶対卒業してるので、私達は背伸びして、一生懸命わかったふりして、背伸びしてお付き合いしてたんですけど、それがいい勉強にはなっています。

### 3. 離婚後の子どもの問題：無国籍児問題

そのうちに、結婚してアメリカに行った人達がアメリカで離婚して子どもを連れて帰ってくるようなケースが少しずつ増えてきました。そうすると、子ども達の国籍の問題とか、それから沖縄に来て外国人は外国人登録をしないといけない。それによって初めて児童手当、児童扶養手当とかいろいろな日本側の制度の恩恵に浴することできるんですが、そういうことはなかなかできないし、子ども達の戸籍がないですから、アメリカは戸籍がないから、本人の出生証明書とかそういうのが必要になるんですね、どうしても。で、出生証明書もどこかにまとめて、この州の人はこことかじゃなくて、生まれたところをちゃんと聞いて、その人口統計局に手紙を書いたり、いろんな州によって向こうの法律が違うので、いろいろ請求される手数料も違うし、細かい請求額に対して、私達はそんなに細かい請求額は細かくていいんですけど、それを作るのにやっぱり手数料高いですよ、手数料の方が高かったりして、5ドル送るのに千円くらい掛かったり、そんなものもありました。個人はやっぱりやりにくいので、我々がそういう問い合わせをやったり、そこにこの子の戸籍があるのか出生証明書届があるのかということも問い合わせで調べないといけないし、そ

れから離婚して離婚調停にいろいろ養育費とか書いてあるのに、その離婚の文書なんかあちらで手続きするとほとんど夫の方が手続きするので夫が全部書類を持ってる、奥さんはもうそういうの持っていない人が多いですね。離婚もすぐどっかで取れるんじゃないで、どこの裁判所で離婚したかっていうのを裁判所でも高等裁判所なり地方裁判所なんかじゃなくて、向こうでいろんな変な名前の昔からある裁判所とか遺産裁判所とかどうしてこんな所に結婚の手続きこんなところでやっぱり裁判所だから何でも受けるって、そういうのを聞いてそこの住所を調べてそこに手紙で問い合わせたり、そういう仕事を文書の入手、文書の取り寄せという仕事もとっても沢山ありました。

後はさっき言った子どもの問題、子どもの法的身分ということで、その外国人登録とか国籍とかそこから始まって、無国籍の問題が出てきたわけなんです。1975年が国連の国際婦人年、その頃、沖縄から沖縄の女性も世界会議に出席するようになったと思います。75年にはメキシコかどっかであったんじゃないですかね、行った人がいます。それから日本の女性がどんどん出ていくようになったんです。1979年が国際児童年にあたって、国際児童年になった時に、当時の沖縄代表部の事務局長をしていた大城安隆さんご存知の方もいらっしゃる方もいるかと思いますが、私が82ですの、彼は85くらいかな、今お元気でしたら。沖国で福祉を教えられていました。その方が事務局長の時に「沖縄国際児童年沖縄からの提言」ということで、沖縄に無国籍児がいるということを訴えたんです。そしたら、それがとてもちょうど日本は右肩上がりの私達が若い頃も右肩上がりか当然、日本はどんどんどんどん良くなるっていうのは皆が信じてたんですね。

その平家清盛みたいにもう日が沈まないぐら

いに思っていて、日本人がそんな無国籍という子どもが日本にいるということに皆がびっくりしたんですね。ありえない、無国籍というのは日本人から考えると戸籍がないとか国籍がないっていうと存在しないような形になりますね。日本で非常に戸籍を重く見るので、そういうふうに思われるんですが、外国では無国籍も国籍の一つ、外国籍の中に何々籍っているのがあるのに、無国籍というのも最終的に国籍を改正するためにそれが使われたんです。無国籍から、無国籍という外国籍から日本籍に帰化するという方法を取って、そのことが初めて問題になった。そしたら婦人達はいくら運動しても戦後靴下となんとか女性が強くなったとか、そういうなんかちょっとからかいのような、マスコミも取り上げられていたんですが、女が何を言うとか、土井さん（編集注：土井たか子）なんかも非常に特別な人みたいにして。日本政府のいろいろ女性関係者達が大変な苦労したらしいことが分かっているんですけど、そういう人たちの、いくらやっても、女性がいろいろあってもあんまり反応がないんですね、取り上げないとか。

そこへ無国籍の問題が出てきたんで、これがあらゆる人の弁護士なり、それから教育者なり、皆の問題として皆がびっくりして、それで沖縄から出てきた無国籍の問題が70人くらいいるって言うことをその時訴えたんですね。調査団なんか来たりして、それを女性運動のちょうど拾ってお神輿のようにしてそれを掲げてそれを行くとどこでも行ける、皆が関心持ってくれる。無国籍児問題、つまり無国籍児問題は母親の国籍を取れないということが無国籍の原因ですからね、父親だけの。それで女性問題が大きく進展していくきっかけ、他の人の他府県の人がどう思っているか知りませんが、私は、女性問題は沖縄の無国籍問題をお神輿にして大きなお祭

りになって、成果を上げることができたと信じています。

国際婦人年の翌年ですかね、国連で女子差別撤廃条約が採択されたんです。それを各国で批准しないとイケないんですが、日本は国籍法があって、その他にも女性差別の法律とか規制はあったんですけど、そういうものがあるために、批准する資格がない、自分の国の法律と違うことが出来ないわけですね。女子差別撤廃条約が世界各国で皆がどんどん承認していくのに日本中々出来ない。それがあったんで、もう政府としては国籍を改正しなければ、これが批准出来ないし、そんな先進国としてこういう差別撤廃条約を批准できないっていうのは恥ずかしいことですから、そこで国籍法の改正が出来ていろんな運動もありました。

皆が日本国中関心をもってそれをやって、1984年に国会を通過して施行されたのが1985年1月1日。1月1日に第一号は法務局に行きますね。国際国籍の取得のために。その時、手続きがすごくペーパーワークが必要だったんですが、それを簡素化して18歳未満であれば、簡単な手続きですぐに本籍が与えられるというふうにまで勝ち取ったんですけど、私達それをこんな機会はないと思って、沖縄の無国籍児達は割合簡単に帰化とかなんとか、一生懸命広報した。お母さん達に話したんですけど、無国籍の人達は日本国籍の人達はアメリカ籍を持つてる人も子ども達もまた日本籍を取ることができたんです。ところが、当時、アメリカ籍、アメリカが一番と思っているので、アメリカ国籍を持つてるから日本籍要らないっていう考えのお母さん達がかかなりいたらしくて、あんまりアメリカ籍のあれから日本籍を取ったっていう人がそれほど多くはなかったですね。3ヶ月、3カ年の経過期間はそれでいて、その後は正式な帰化手続きになるっていうことになったんです

が、あんまり沢山は日本国籍を取得しなくて。あの時、お母さん達が取ってくれないからしょうがないですよ、いまさら。もちろん手続きをすれば、今でも理由があれば取れるんですけど、そういうふうなものがバックグラウンドにあります。ですから、結婚・離婚の問題、そういう身分の問題、連絡消息、文書、情報提供とかそういうのを仕事にしております。

#### 4. 国際福祉相談所の財政問題

復帰と同時に県から国際的児童家庭相談を委託するという、私達がやってたことは国際的児童家庭相談事業というので、補助金が県から毎年出たんです。それと同時に、日本自転車振興会、競輪は、大きいものを建物を作ったりとか大きいものしか援助しなかったんですが、お願いした結果、国際福祉相談所も向こうから補助金をもらえることになりました。私達だけだそうです。それがずっと続いて、いつまででしたかね、復帰の後そうですね、そうなったわけですよ。ですけど、それでもすごく大変で、復帰の時点で国際福祉相談所が宜野湾市に移った時点で、その建物に一部にGoodwill Shopというのを作りました。これはアメリカ側からの提案で、Goodwill Shopというものは、アメリカに沢山、あっちこっちにあって、福祉団体や身体障害者の団体が古い家具とかお洋服を寄付してもらって、それを家具なら直したり、ペンキ塗ったりして、それからお洋服もちゃんとして売る売店ですね。

貰うのがタダですから、そこで働いて、そこでやって売る、そうするとアメリカ軍の中でそういう古着が集まる場所があって、そこが国際福祉にはあげましようということで、毎週のように取りに行つて、いろいろもらってきて、そこから沖縄の古着屋が始まったのがそうじゃないかと。軍からの軍服の古い物とか、ああい

うのがとても人気があって、業者が出入りしていたんですね。私も自分の子ども達にアメリカの子ども服を買ってきていましたし、随分いろんなのをくれました。その中で一つ面白いと思ったのが、軍のPXから新品の洋服とか靴下でもそういうのが来るんでね、すごく新しくて、新品なのにどうして、だけどこっちがちょっとほつれてるからとか、ボタンが取れてる、だったら直して安くでちょっと売ったらどうなんですかって日本的に考えていったら、そんなことしたらもしちょっとでも傷つけたりしたら安くなるって分かったら、皆が来て、落書きしたり、引っ張ったり、破いたりする、だから、それをやらない。ああなるほど、国民性と合つてとっても面白いなと思いました。

とってもそこ繁盛したんですよ。まあ、やることが細かいことで。資金が県の補助金と日本自転車振興会の補助金だけでは困るので、他にチャリティーの話は日本人からすると名前が欲しいわけですよ。国際福祉のそういうのをやってもらったり、あるいは、アメリカ軍が提案して仮面舞踏会というのをライカムの将校クラブでやって。写真しか見たことないんですが、本当にヨーロッパでやってるようなこんな眼鏡とか、こんないろんなのして、ああいう豪華な仮装、仮面舞踏会なのを将校達がやって、そこでお金を集めて。他のお金の集め方も文化によってとっても違って面白いと思って。フラダンスとかベリーダンスを習ってる人達が夕食会で切符を、例えば20ドルくらいで売るわけですよ。そこにボランティアかなんかでそういう人達が来て踊るわけですね。寄付をどうするかというと、1ドル札とか10ドル札かを、こういうふうにやってる、ここにこう押し込んだり、ほとんど裸みたいなものですよ。そこにこうやって、男の人達が入ってるんです。こんなお金の集め方もあるんだな。だからって日本でそ

ういった良い考えだったり、できるわけじゃないんですけど、いろいろそういう面白い発見っていうのはありました。

今でも皆さんいろんなところいらして、AWWA（編集注：American Welfare & Works Association、米国福祉事業協会）とかアメリカ福祉協会ですか。最近短い訳に変わってそうなっていますが、そこから、いろいろな物を備品を貰ったりしたとか、沢山ありますよね。あの人はあげる時に贈呈式で宮古とか八重山でも飛行機で飛んでってそこでやりましたね。あれは一つの軍の占領地政策の一つだと思いますね。婦人会を活用してソフト面のものをやるとか、高等弁務官資金よりはずっといいですよ。弁務官資金は明らかにもう政治的に切りますから。皆さんは分からないですけど、よくありましたよ。例えば、瀬長亀次郎さんの関係であるとかで、豊見城のどこかでそこまで舗装してここでやるって、また次しばらくするとこっちから舗装してこの間はやらない、あの人出身の部落だから、そういう話聞いたことがあります。北部のちょっとしたトンネルとか道路なんかは皆弁務官資金でできてると思いますね。そういうところが国際福祉、その復帰の時に国際福祉が組織替えて社会福祉法人になったんです。それで、それが第二種ですよ。第二種福祉事業っていうので、第一種が児童を実際預かってる、児童園とかそういうところなんですけど、理事会はお金を作るのにいろいろ作るのに工夫して苦労してたもんですから、内部の考えとしては、ここに児童園を作れば、児童園に委託費も国のお金も流れてくるから、そこと相談所の人の入れ替えとか、こっち一年行ってこっち行ってというふうにして相談所が助かるじゃないかっていう意図があったわけですね。けど、表面はそうじゃなくて、中部に児童福祉施設がないから、児童園がないのでということで、美

里児童園が1980年にできました。そうすると、やってみるとそれどころじゃない、絶対あっちのお金を一銭でもこっちに回すことが出来ませんよね。すごく管轄が違うので、それでそうすると、生身の子どもたちを預かってるあっちの方が重要で、あっちにもっと力を注がないといけないという、理事会の実態もあって、とても相談者のお金まで面倒見られない。いろいろ私達も努力したんですけど、もう国籍法が改正になったんで、私達は一応これで一つの事業は終えたかなっていう感じがしたもんですからね。

それから、その頃から若い人達がお互い連絡を取り合ったり、英語がちょっとできたり、私達の頃まで今もうおばあさんになってる人達の頃まではろくに学校も出てなくて、ゴザしか勤めるところがないですからね、基地の周辺しか。そこに来ていろいろなことをやって水商売だったり、いろいろなことがあるんですが、後は第二ゲート通り、理髪屋がいっぱいあったり、女の子が皆理髪屋になってた。理髪屋で結婚した人沢山いますよ。国際結婚。アメリカ兵にすれば基地内では安い料金で髪切ってくれるんですが、それよりも女の子との接触が欲しいからこう頭をこうやってもらったりして、基地外に出てきて髪を切りに、そこで親しくなっているいろいろ結婚まで行くとかありますし、もちろんバーやあいうことも、夜はフロアショーでフィリピンの人達沢山音楽とかもいろいろプロフェッショナルでいたので、フロアショー、フロアショーって呼び込んで第二ゲートゾーンで、それから、今のパークアベニューの人や、後は、BCストリートって言ってたんですね。ビジネスセンター、意味わかります？セックスビジネスのストリートってビジネスストリートってつけたんですよ。皆アメリカ兵はBCストリート、八重島の方もそうですし、あの辺にいっぱい女

の子達が、皆近くの方は家族全員親も親戚なんかも沢山基地の周辺に集まって仕事をやるんで、見られると具合の悪い人達沢山いるんで、意外と水商売なんかに行かなかったんですよ。水商売に行ってたのは奄美大島の方多かったですね、とっても。後でいろんな問題で戸籍を取り寄せたりするのにしょっちゅう向こうに手紙を書いてあっちの役所に行くから、随分多いなっていうことを感じた記憶があります。

## 5. 誰でもすぐ来られる相談所

私達の事務所はどういう事務所かという、誰でもすぐ来られるウォークインが出来る、歩いて、とにかく入口に入ってくる、何でも一応話を受けてくれる。私は相談所っていうのがそうでなければならぬと思ってます。電話をかけてもいいけど、来る人多かったですね。ちょっとこれ分からないから行ってみようかとか、アメリカから英語の書類が送られてきたけど、大体離婚書類ですけど、それを持って飛んで来たり、それを翻訳事務所なんかに行くと読むだけでなんかお金がかかるし、読んでも意味が分からないとか、ただ、英語だけではそういうのは分からないですよ。日本語が分かるからって日本の判決本皆理解出来るわけじゃないのと同じで大変難しい。大体そういうのが来る時はもう期限が切れてるんですよ。

アメリカ、とっても注意しなければならなかったのは、書留っていうのは、アメリカでは、本人がサインして受け取るっていう意味なんですけど、アメリカ人は受け取りを「ノー」と言うんです。すごく普通にあります。こちらがせっかく日本で裁判を終わって、アメリカに最終的に送って、本当は領事送達って外務省を通して領事官を通して、そういうやり方をするのが正式らしいです。だけど、それをやるとすると変な書類が来たっていうことで受け取ら

ないです。ところが、日本では、沖縄で特にそうなんでしょうけど、「うちの娘、正月とお盆にしか返ってこないけど、じゃあ、おばあちゃんに名前書いてから、来た時にあげてくださいね」みたいな、書留でそういう扱いをする。今でもそうですよね、私達、誰でも、家族誰かに皆自分で書いて受け取ってますから。そういう違いがあって、領事送達はよくないっていうのは私達分かったんで、普通の手紙に入れて送ってます。そしたら着いたら向こう受け取ったものだっていうふうに主張できますし、受け取ってないっていう反論がない限りは、もうそれで済みますので。

歩いてちょっとしたことで子どもを連れてでも相談に来るとか。ですから子ども達も母親の件が終わって、しばらくすると、自分は小さい時お母さんと一緒にここに来たんで、また相談に来ました。また同じような問題がまた娘が持って相談に来るんですよ。2代っていうのは結構ありましたね、私達がやったのは。そこに皆長い間一カ所にケースワーカーがいたから、それも出来たんですが。それから、さっきいったように、いろんな困ってる人の情報が個人の米軍ですと、米軍の軍からチャブレンからそれから病院に福祉部っていうのがあって、そこも向こうも同じような子どもを育てられないとかっていうのをやるので、連携があって、向こうに行ったり、向こうから、或いはその他でも夫に薬を処方してるけど、妻が日本人で英語が分からないから、薬の飲ませ方を通訳して欲しいと呼ばれていたり、80年代になってから、福祉機関、ファミリーサービスとかそういうのができてきたんです。沖縄、割合早くそういうものが出来てきたんですね。ファミリーサービスセンター、それからファミリーなんか、名称がちょっと違うんですが、各部隊ごとにそういう困った人を助ける。だから私達のよ

うな相談も、離婚とかもですけど、また向こうの人は本国でいう自分の家族が病気かどうかのうっていう相談も借金もしたり、そういうのも相談に乗れる。

## 6. 国際福祉相談所の閉所

各教会からも国際福祉には寄付がありました。個人でも宗教的な意味から毎月自分の給料の何割かをチャリティーに寄付するという趣旨のそういう教会があって、そういう人達も来て、アメリカの婦人クラブは各ベースに将校夫人クラブ、それから下士官夫人クラブ、一般兵の夫人クラブとかって、将校夫人クラブはスーベニアショップを運営してるので、儲かってそれでAWWAとかああいうのができるんです。そこから毎月決まって、寄付が届いたんです。向こうが届けてくるんです。ところが寄付は同じ。例えば、毎月300ドルであっても、円が違いましたでしょう。360円から300円になって、私達が受け取る分は減ってくるわけですね。だから、そういう問題で、経済的に立ち行かなくなる。いろいろ美術展とか版画展のチャリティーをやって、そのくじ引きで一等こんなのが当たりますとか、200円とか300円とかくじを買ってもらって、そういうのもありますけれども、結局最終的に足りないので、福祉相談、国際福祉会の理事会がもう美里だけで精一杯なので、困るっていうことで、で、私達もういいじゃないかって。こっちも「ているる」（編集注：沖縄県女性総合センター（当時））もできるっていう話もあっちこっちいろんなのが相談受けられるところまでできてきたから、いいかなっていうのもありまして。結局すぐには止められないので、1998年の3月で終わりですから、97年頃からアメリカ側には広報をずっと出してたんです。もうすぐなくなりますから、あとのことは考えて下さいっていうことを言ってたんですけ

ども、沖縄側がそういうのが取り上げなくて、いよいよ来年も3月で閉まるっていう時に、多分97年の夏か秋くらいの県議会と思うんですが、そこで共産党の人が基地はなくなるのに、どうして国際福祉の相談事業がなくなるかっていうのを見たときに、県の誰が答弁したか分からない、県の答弁というのは、「ているる」で婦人相談を初めから日本語の相談は受けるつもりだったんですよ、女性財団どこでも各県やりましたから。その上に、国際福祉相談も受けるっていうふうに回答したんです。私、それ見て、誰が来るんだろうって思っていました。結局、年も明けて今っていう時になったら、こっちから誰か来ないと困るということで、国際福祉（相談所）でも給料ってというのは庶務の人とかはちゃんとしたお給料もらってたんですけども、最後、事務局長をやった島本幸子さんは給料分も全部寄付して下さいました。一銭も貰わないで、それも貰った形で。そんなふうにして、私達もうお給料は時給で、自転車商工会の補助金っていうのが、一時間につき、ワンアクションにつきいくら、一時間から二時間を単位としてワンアクション、結局家庭訪問一回して、一件で、それで千円でしたかね、そういう計算でいって。

それに国際福祉（相談所）がなくなるまで、向こうで働いてた人達は皆アメリカ留学の経験があったんです。それで、裁判所に通訳人として登録して、裁判所でお金を貰ってそれを持ってきて国際福祉に入れて、そういうふうにしていたんです。もうこれでも成り立たないってことも分かってましたから。それにケースの件数としても、だんだん減ってきて、若い人達、お互いに電話とか今インターネットとかメッセージを経て、こうしたら離婚が早くできるらしいとかこうしたらいいとか、必ずしも正しい情報じゃないんですけど、そういう形で皆やって、

昔みたいをお願いしますって、もう泣き込んでくる人は少なくなりましたね。

ベトナム戦争の頃までは、その後くらいまでは皆各国にタイにも台湾にもあっちこちに米軍基地があったんですよ。沖縄に来てる兵隊達はそこに休暇のために遊びに行くわけですね。いろんな病気も持ってくるし、麻薬も持ってくるし、いろいろだったんです。麻薬なんか今みたいに何グラムとかちょっとくつついてるのも見つけたとか、そんなのじゃなくて、復帰のすぐ後の麻薬の裁判なんかもバケツのいっぱいのお金で押収されたとかですね、もう量にしても凶悪事件みたいな、殺人事件とかそういうのにしても、やっぱり心がすさんでるっていうのがあっちこち、まだベトナム戦争もあって。その頃、BCストリートが流行ったのが、「結局沢山戦場手当とかいっぱい貰って明日死ぬ。ベトナムに戻ったら死ぬかもしれない。ここで最後の休暇だから。」ってどんどんお金を使って、その頃別にちゃんとしたウイスキーじゃなくても適当になんか入れて混ぜたら、いくらでも売れたっていう話ですよ。人の話でもお金受け取るにも時間がないからバケツ置いてそこにお金をどんどん落として行って、足でしたら、ここで、手では飲み物を渡して、そういうようなことを聞いてます。

そういう時代を過ぎて、綺麗に3ヵ年ありましたから、3ヵ年の間にいろいろ整理して小人数で、相談は受けてるんですが、相談をしたらどこにどうしたらいいかで、私達本当に心配して、「ている」で全部やってくれるんだろうかっていうことを心配して、提案とかいろいろしたんですけど。ここに、国際福祉相談所の閉鎖に至る経過とか、相談内容の変化っていうのはこういうふうにあります。

年間の新規受付数は600件台で推移してい

るものも、相談内容において深刻性、緊急性の度合いが薄れてきており、国籍法改正、協議離婚の国際結婚への適用など、当事者の負担は法制度面から軽減してきている。若いクライアントは英語の知識もあり、社会資源の活用にも慣れており、情報提供すれば、自ら動いて問題解決に当たることもできる世代である。女性総合センターなどの女性相談の他は国際情報センターの設置により、外国人の相談も周知することが期待されている。

これは国際情報センターが前田に浦添にできるという他のと比較して最近話題になってますけど、本当にこれできるとして、私なんか一生懸命委員会に参加したんです。後で分かったら、大田さん（編集注：大田昌秀知事）に皆「はい、はい。」ってやってただけで、本当は職員、県庁の職員は全然やる気はなかったっていうような話を聞きましたし、それに関連して、フィリピンにお嫁にいった沖縄の人達の実状調査ということで、公文書館の人とか私なんかフィリピンまで調査に行ったことがあるんですけど、それも報告書出してそれでどこに行ってもどうなるか分からないです。すぐその後断ち切りになりました。

## 7. 国際福祉相談所閉鎖後の受け皿

まず相談所が閉鎖した時の受け皿としてはこの女性総合センターとか女性相談所、県民相談コーナーとか、いろいろ福祉事務所、なは女性センター、それから、国としては戸籍や国籍問題で法務局、それから離婚には親権者の指定などで家庭裁判所、それから入管ですね、在留資格、離婚しても在留資格あるのかどうかとか。民間にはパールバック財団というのがありまして、そこやってた方も亡くなったんですけど、



あちらは30年くらいありましたね。パールバック財団で混血児の子ども達にスポンサーから手紙が来たり、お金を送られて、ところが、スポンサーというのがパールバック財団の古い方では、年寄りのおばあちゃん達とかおじいちゃん達、その人達で5ドルとか10ドルとか送ってくるわけですよ。お誕生日おめでとうとか、そしたら、こっちは連絡して5ドル取りにおいででも、替えるのにお金がかかるし、5ドルそのまま使ってもいいんですけど、パス賃と引き合わないわけですよ。5ドル10ドルもらうのに、向こうの人達は預金通帳作って、それに皆入れるようにしていましたけど、パールバック財団でいろんな国際的な委員会に結構私達も出ていたんですが、その人達は皆もういなくなりました。

だから、民間団体としては、人権協会とか、弁護士会。弁護士会でも相談員を置いてもらえないかって、弁護士会の中に言ったら、弁護士さんにとっては弁護士が話を全部聞くんで、後は受付の女の子がいればいいという考えですね。今もそれは変わらないと思うんです。

相談員の位置づけがまた曖昧ですよ。私は相談員がいることがすごく大切で、そこでちゃんと話を聞いて、問題の本質を本人が訴えていることと言っていることと、ちょっとしたバックグラウンドを知ると、他にもこういう問題があるっていうことを分かりますからね。だいたい私が聞いたら、本人よりは私の方が大変なケースだなって思うんですが、本人は結構分からないのも沢山あるんですね。私達から見たら、話聞いたら、これをやるまでにやって、これやって、これやって、ちょっと大変だなって思うんですけど、意外とそうですね。宜野湾のセミナーハウスが割合積極的に。職員が変わるといろんなところ、皆変わるんですが。あっちもいろんなこと国際的なこと相談もやっているよ

うでした。それから東京にある日系インフォメーションセンターとか、沖縄にはフィリピン名誉領事館があって、今も活動してますね。

私達は軍の方といい関係にあったんで、軍の赤十字と。日本の赤十字は赤十字病院とか血液の献血とか、医療関係だけなんです。私達は赤十字っていうと緊急連絡、例えば、沖縄で親が危篤になって、娘に電話を掛けたりする。軍用機で帰りたいけど、軍用機っていうのは空きがあるわけじゃなくて、いつもいっぱいなんですよね。それを向こうにいる人が向こうの赤十字に、各基地に赤十字社があるんで、そこに行つて訴えと、そこが優先的に訴えと、どういう状況か、本当かどうか、ただ帰りたいから言ってるのかどうか分からないので、それをどこの病院の医者は誰々、病名はなんて言うの、聞いて欲しいっていうわけですよ。そこで、こちらの赤十字は私達に電話してどこどこ病院の誰々先生から聞いて欲しいって。アメリカではそういうのが一般的らしいですよ。日本ではまだなんか偉い人、先生とかなんか電話で大変失礼ですがっていうような感覚がありますでしょ。今はそうでもないけど、アメリカでは電話で全部済まされることは済ませた方がいい。

で、問い合わせてくるんですよ。そこ探して、「何々先生お願いします。」って言ったら、看護師さんがだいたい出ますと、「何の用事ですか。何ですか。」っていういろいろ聞くんです。「ここアメリカの赤十字からの依頼で、先生からのお話聞きたいんですけど」。「今忙しいですから。」とか、なかなか分かってもらえない場合があって、緊急連絡なのにつて思いながら、直接訪ねて行ったりしたこともあります。そこで先生から聞くのが、現在の病状とそれから、これからの予診、これからどれくらいどうなるのか、生きられるのかとか、「娘がいるから娘最後かもしれん。来た方がいいと思いますが、先

生レコメンドしますか」。先生が、「はい、出来たら来た方がいい。」と(娘が)来るようにレコメンドして、「病名がこうこうで、余命はあと1週間くらいということです」。それやったらすごく本人がやって飛行機のところへ軍用機で、軍用機は多分家族、そういう場合はタダですから。私、そういうのは大切に、赤十字でやるといいなと思ってます。これ世界中の赤十字がやってることで、世界のどこかに行って、緊急連絡とかいろいろありますよね。そういう場合でもなかなか個人の力ではできないとか。

それから、赤十字という名前がとっても世界的に通っていて、私がアメリカの空港で寝泊まりしてる日本人の女性がいるって言うんで、誰か連れに行かないと入管で引っかかって、収容された後、出すのが難しいよって言うんで、アメリカフィラデルフィアに迎えに行ったことがあります。知らない人ですけど。写真とかで、連れてきたんです。そういう時でも、行くときにでも、こっちの赤十字が、「ちゃんとこの人はケースワーカーで、こういうふうには人を連れに行ってるだけで、必ず帰ってきます」と文書を書いてくれて。女の人が一人で渡米すると一時とっても警戒してて、全然ビザも出さないことがあったんですよ。皆行ってから居座って、結婚してその後問題になってくるんで。ところが、赤十字の手紙を持ってるのと全部大丈夫でしたので、そういう意味では赤十字の力をもっと利用して、沖縄の人、うちなんちゅがこんなに世界中に広がってるんですから、いい意味で活用したらいいなって思うんです。

## 8. ケースワーカーのトレーニングと役割

国際福祉(相談所)でどういうふうにはケースワーカーをトレーニングしてたかと言うと、一応どうしてだかわかりませんが、今も多いんですけど、今語学留学とかそういう形の留

学が多いんですかね。昔はそういうのじゃなくて、せつかく時間とお金を使って、初めから、例えば、最初は大学院が主だったんですけど、米留は。皆大学院に放り込まれるんです。一月くらいはアメリカに行ってから、オリエンテーションというのがあるんですが、その時の南米の人達はあんまり上手じゃない英語でもどんどん発言する、日本人は割合正確に言うんですが、あんまり発言しないというような。大学院に教室にそのまま放り込まれるんですよ、一人だけ。この専攻は一人、学校は自分で選ぶわけじゃなくて、いわゆる米留っていう制度が向こうを選んで学校に派遣する。そういうことでしたから、苦しいながらも皆そうやってある程度英語を自分で習得して帰ってくるんですが。その他に自分で自費で行った人達も結構いて。

どうしてか分からないんですが、「相談員、ケースワーカー募集。資格はアメリカの大学卒業、それで出来れば、教育社会福祉関係専攻した」とか、タダの新聞広告を出すと、そんな沢山来るわけじゃないんですけど、ずっとそういう人が来てました。そういう人達が相談は未経験ですので、相談員が前からずっと皆辞めないでずっと国際福祉は続けていたもんですから。そこで一緒に相談受けて、一緒に仕事するようになって、クライアントには面接で来るともう一人一緒に座って話聞いていいですかって言って、いいって言って。アメリカでは全部書類で処理しますけど。米軍の基地内に行っても。そうやって一緒に2年ぐらい一緒に仕事をしてたら、皆できるようになるんです。

相談室で電話かけてきて、「今日は国際福祉の担当いません。今日はこれの担当はいますせん。」とか、それはおかしいと私は思います。電話かけたら、皆が自分はこれ得意じゃないと思って、自信を持って電話かけた人は困って掛けるので、その人が不安げな不明確な返答

をすると信頼性がなくなりますよね。だから何でもわかるような調子で相手に一応聞くわけですよね。聞くのはほとんど日本語ですから話を聞いて、それから、自分の手に余るなと思ったら、「少々お待ちください。」と代わって。側で聞いてて分かりますから、代わったりして、電話かかってきたら何でも受けれるように言うように、私達の国際福祉ですから、他の電話がかかってくることはそんなにはなかったわけです。そういう具合にしてやってきました。

私が「ているる」に来るようになった経緯は、そういう議会答弁があって、4月から始まるってよ。そしたら、その時には土曜も日曜も祝祭日もここ開いてたんですよ、相談室は。全部開いてたのかな、それでいて、時間制限、週44時間とか何とかっていう制限があって、1カ月働いても皆家庭を持って働いていますから、国際福祉（相談所）も多くなかったんですけど、それでも、一時間千円っていうぐらいのあれですから。でも誰もここには土曜、日曜とか子どもがいるし出勤出来ない、誰もね。なので、ちょうど私が一人来るまでに二人うちを出て、結局親もいないくなってたんですけど、父の日も母の日も子どもの日も、何も関係ないのは私だけだったんです。結局もう私が行きますっていうことで来たんですけど、土曜とか日曜とか子どもの日とか、特にほとんど最初の何年かは私がやってました、一人で。ここに来てから気が付いたのは、皆さん、「ているる」に3年いて、次どっかに3年いて、また那覇の福祉事務所にいてとか、こういう場合ですよ。だから、皆さん、行政のやることをお役所のやることを皆とって分かってらっしゃる。でも、それだけでは不十分じゃないかなって思うんですね。私が目指したのは、英語の出来る人を取って、それからこう回るんじゃなくて、こっちで2年くらいやって、それから良いところへ、もっと上へ

飛び出していく。

ここに私達がいる頃は全部国際相談って分けないで、そのまま皆受けてました。弁護士が実際に手を付ける前にやることの方がむしろ多いんです。いろいろ皆それをやって整理して翻訳できるのも翻訳して、それで本人連れて、弁護士の所行って、「こうこうこういうケースで、こうなって、こうなって、今までこういうことをやりました。」っていうことを先生に願います。この人、経済的に困ってるんで、先生ご配慮お願いしますとか、そういうことで繋いでたんですが、弁護士まではいかないで済むケースの方が圧倒的に多いんですよ。自分だけで事前のケースワーカーの介入なしに弁護士に行くと、弁護士の人に、こうしてですね、こうしてですね、この話だけで一時間で一万円くらい取りますでしょう。すごい無駄なんです。だから、良く知ってる沖縄の先生方は、そういうものを一切お金取らないんで、弁護士費用の最低の弁護士費用だけをチャージして下さったんです。

## 9. 養子縁組における家庭調査

我々、(国際福祉相談所では) 理事会があってもなくても何も特にやるわけじゃなくて、現場私達、自分達で皆少ない人数で相談して、このケースもこうこうでやりましたので、すごくやりやすかったし、それにどこにでも手紙を書ける、フィリピンで人探しとかしてたら、なんか市があった、なんとか市長とかに当てて手紙を書いたり、それから、アメリカだったら各州社会福祉局があるんで、局長宛てにいろんな手紙書いて、どこら辺にたぶん住んでるけど、おうちが普通なのに沖縄の両親が心配してるから、家庭訪問して報告してくれないとか、それに対応してくれる方もあるし。なんか無視して、自分達の管轄ではないって無視するのか、無視するところもある。無視されても無駄に

なっても当然だからっていうので、いろんなこと考えられるあらゆることをやりましたね。だから、そういう意味でフリーハンドがあって、私達は、誰にもあんまり許可を貰わないで、お互いやって、それで、理事長のゴム印を押したんです。自分達の担当ワーカーは誰々です。理事長の印を押して出しましたし。そういうことをやるためには、各団体のちゃんとした便箋ですね、あれがついた封筒とか、そういうのがあればできるんで。そういうのが悪用されても困るんですけど。

養子縁組も今はあるにはあるみたいですけど、内地で問題になって、特別養子っていうのがありますでしょう、あれすごい問題ですよ。養子縁組を隠そうとしてる自体おかしい。アメリカでは、小さい時、ちゃんと教えて、「簡単にお会いできたんじゃないのよ。お父さんとお母さんはどっちも苦勞して、もう何年も何年もかかって、お願いに行ったり、いろんな調査を受けたりして、ようやくあなたに巡り合えた」って。だからとても大切なことだっていう話し方をするっていうように言われてるんですけど、日本では、本当の親じゃないってことを隠すっていう、やり方ですよ。だから、アメリカ側からは米軍とか病院とか福祉機関、教会、赤十字、いろんなところからこっちが知られてケースが来たんですけど、フィリピン領事館とか、州の福祉局からも、それから、アメリカの裁判所からも来ました。夫婦で親権を争って、片っぱは沖縄勤務になったと、その場合、夏休みの間こっちにやりたいけどとか、でも、家庭環境は分からないからどうかっていうので、それを調べて、私達、家庭調査を完全にやるために、これはアメリカのビザの規定にあるわけですが、ちゃんと資格のある団体による、家庭調査っていうのがビザの添付条件なんですよ。

沖縄にそれはないんですが、それは屋良知事

から頂いた、国際的児童家庭相談っていうのを訳して、国際的児童相談っていうのに養子縁組が入ってるという解釈をつけて、それで我々もアメリカ政府から認められてるっていう団体だっていうことを証明して、そういうのをつけてアメリカの社会福祉局とかに出して、向こうの親権の争いの時にここに応急に調査してほしい、子どもが良い環境にあるかどうかって。ベースの中に入ると、とてもフェンスに囲まれて芝生が植えてあって、近くに公園もあって、ブランコがあってとかね、それから大きな一室は客間として空いてて、そこに子どもが入ることができるからとか。それから、それだけでもなくて、近所の人にも話を聞く、もしあなたの家では何かあったら、隣の家のあの夫婦に自分の子を預けますかって、そういう質問するんですよ。

日本人みたいに何でも推薦状とか何とかっていうと、「はい、はい、はい。」って適当に書くんじゃないで、アメリカ人は本当に正直です。子どもを預けてもいいっていう人もいれば、ちょっと考えてからだね、他に方法がなければ、相談してから、福祉の方に相談してからとか、返事はいろいろですよ。上司からの推薦状も、養子縁組の申し込みに必要なんですけど、その時も、まだ自分は、着任して6か月だからあんまりよくは知らないけど、過去の経歴を見ると、別に悪いことはないとかね。良いとは言わないで、今までに何か悪いことをしたとか、不都合があったっていう記録はありませんとか、こういう書き方なんです、全然考え方が違う。そういうのを調査して、二、三枚にまとめるんだったら、我々もやりますけど、アメリカの資格を持った家庭調査できる人、この人たちは大学院ちゃんと出てないといけない、アメリカの正式のソーシャルワーカーの資格。この人たちを雇って本格的な家庭調査させて、そこだけは福祉の問題なのではないからお金を取ってまし

た。向こうの頼む方も沖縄で子どももらえないから不利になるんじゃないかと、それにちゃんとした家庭調査があれば、次行ったところでまた養子縁組したいって申し込んだら、これにつけさせたり、それはちょっと変更するだけでも、これがずっと通るんですよ。で、外国籍の子どもをアメリカに連れていくためのビザの条件が家庭調査なんですよ。

オリンピックがありましたね、ソウルで。あの前までは、沖縄の人が沖縄にもらえる子がいないから、あっちでは混血児なんか差別されて、捨てられてるのが多かったっていう話ですが、向こうに子どもが沢山いるから向こうに行ってもらいたいっていうことで行って、向こうは向こうで私達の事務所と連携を取って、向こうから、子どもの報告書一いつどこで拾われて、どうしてどうしてって、健康診断なんかつけてくる。裁判所に行って、宣誓してそれで子ども貰って、沖縄に帰ってくる、この人達はアメリカに行こうとしたら、ちゃんとした養子縁組の手続きが家庭調査が出されていないっていうことで、夫は転勤してアメリカに行っちゃったけど、奥さんは赤ちゃんを連れてここに残るといようなのが出てきて沖縄の問題になったんですよ。その時にアメリカ人の家庭調査をやりましょうっていうことで、私達が始め、福祉の問題とちょっと違うから、お金をチャージしてもいいんじゃないか、それを受け取るのはアメリカ人のソーシャルワーカー、だから、全然私達のやってる、国際福祉相談と別の形でこれ、お金をチャージしています。

## 10. アメリカ合衆国の関係機関や専門的な情報の入手方法

自分たちで、名前も、英語の名前なんかは、正確にスペル出来ない人も結構沢山いたんですよ。赤ちゃんの名前の付け方とか、その他にも

あっちこっち行って、電話帳もあったり、したり、どこどこいけば、何が、書類の請求先っていうのはアメリカではいろんな冊子があるので、それを知ってる人とかなんか、チャブレンとかを通して手に入れて。そこに私達は、10万円くらいですかね、アメリカの法律書、これくらいになる、マーチンデルハーデルを買っているのはこの中のニューヨーク州っていう中の離婚とか養子縁組とかの所だけですけど、それを毎年買ってましたよ。そこからコピーして、その翻訳するっていう。そういう連絡先が必要なら、新しくいろいろなと思いますけど、見つけたらもってきましょうね、ここに。

\*編集注:小見出しは編集で入れました。また、字数や個人情報の関係上、一部、省略した部分があります。

\*録音データをご提供下さった、おきなわ女性財団に深く感謝致します。

平田正代 主要著作一覧

著者名/編集者	論文名	書名	出版年	月	号数	No.	出版社	ページ数	備考
ケリー正代	なぜ国籍がない…? 沖縄から見た国籍法改正	青い海	1980		93		青い海出版社	31-36	特集/沖縄の混血児たち
ケリー正代	無国籍児に光を —父系主義から両系主義へ	あいふいおーらむ 言語	1983	8月		15	あさ企画	32-33	
ケリー正代	沖縄における国際福祉の現状 —無国籍児問題を中心にして—	沖縄大学法学会誌	1983		12	4	大修館書店	314-315	
ケリー・平田正代	中年の精神衛生	精神衛生	1984		3		沖縄大学法学会	1-25	
ケリー・平田正代	夫婦の精神衛生 —夫婦はゴムまりのように まるく弾んでいたい—	精神衛生	1989		36		沖縄県精神衛生協会	60-69	
平田正代	国際結婚と原籍の国籍 —戦後沖縄における駐留米軍軍 人・軍属と沖縄女性との結婚 問題	戦後沖縄の社会変動と家族 問題	1989		37		沖縄県精神衛生協会	1-6	
ケリー・正代	国際結婚と原籍の国籍 —戦後沖縄における駐留米軍軍 人・軍属と沖縄女性との結婚 問題	新沖縄文学	1991				アテネ書房	294-304	
平田正代	国際結婚と原籍の国籍 —戦後沖縄における駐留米軍軍 人・軍属と沖縄女性との結婚 問題	新沖縄文学	1991		89		沖縄タイムス社	94-100	特集/アメリカ文化との遭遇
平田正代	基地と沖縄の女性たち ～国際福祉相談所窓口から 見たケースの変遷～	平成6年度全国母子寡婦指 導者研修大会並びに第41 回九州地区母子寡婦福祉研 究大会報告書	1994					89-114	
平田正代	講演会レポ —基地と沖縄の女性達 女性要請団・初の訪米 ～女性の視点で 基地問題訴える～	季刊福祉おきなわ	1995		27		沖縄県社会福祉協議会	22-36	平成七年度全国婦人相談員・心理 判定員研究協議会講演
平田正代	国際化社会に向けての相談機能の あり方	沖縄県広報誌 大きな和	1996	1月	244		沖縄県広報協会	24-25	平成七年度全国婦人相談員・心理 判定員研究協議会講演要約
平田正代	国際化社会に向けての相談機能の あり方	沖縄県広報誌 大きな和	1997	4月	259		沖縄県広報協会	8-11	
平田正代	ハーブ子の奪取条約のわが国の批 准と沖縄の抱える課題	児童福祉法制定50周年記 念誌 九州地区家庭相談員研修沖 縄大会記録編	1997					27-35	
平田正代	ハーブ子の奪取条約のわが国の批 准と沖縄の抱える課題	沖縄法学	2012		41		沖縄国際大学法学会	111-158	
平田正代	沖縄から女性の人権と平和を考える	女性展望	2015	9、10月	676		市川房枝記念会	9-14	特集 沖縄と戦後70年
平田正代	島本さんのこと	追悼集 ありがとう 島本幸子さん	2013	1月				4-5	

平田（ケリー）正代 主要講演一覧

年月日	講演名	主催	種別	役割	場所	タイトル・テーマ	肩書	他の登壇者など	所収雑誌など
1988年 11月18日	第19回精神保健普及月 間実施要綱	沖縄県 沖縄県精神衛生協 会	公開座談会	講師	那覇市民会館 中ホール	中年の精神衛生 ーミドルエイジのよりよ い生き方を求めてー	主婦	石津宏・吉茂・石田芳 子・我那覇正人	『精神衛生』1989年63号
1991年 6月21日	「沖縄のハーフとアイ デンティティ」	那覇市平和学習講 座		コーディネーター				スティーヴン・ハマーフィ 重松	『沖縄発〜平和へのメッセー ジ』第2回平和学習講座集録』 那覇市中央公民館
1994年 10月19日	平成6年度全国母子養 育指導者研究会（並 びに第41回九州地区母 子養育福祉研究会）	全国母子養育団体 協議会 全国母子養育福祉 団体協議会九州部 会 沖縄県母子養育福 祉連合会	第4分科会	コーディネーター	那覇市民会館 大ホール	国際家族年とひとより親家庭	国際福祉相談所次長	ベティ・C・ホフマン （パールバック財団所長） 玉城隆雄（中国教授） 池宮城紀夫弁護士	平成6年度全国母子養育指導 者研修大会並びに第41回九州 地区母子養育福祉研究会大会報 告書
1995年 10月20日	平成七年度全国婦人相 談員・心理判定員研究 協議会	厚生省 沖縄県	講演	講師	ロフジールホテル オキナワ	基地と沖縄の女性たち ～国際福祉相談所窓口か ら見たケースの変遷～	国際福祉相談所次長	なし	季刊福祉おきなわ第27号 大きな和（要約）
1996年 6月16日	「沖縄からのメッセー ジ」事業	沖縄県	講演	講師	岡山市立 市民文化ホール	福祉相談の窓口から見た 基地問題	国際福祉相談所所長	なし	～基地と平和と文化を考える ～沖縄からのメッセージ事業 報告書
1996年 6月17日	「沖縄からのメッセー ジ」事業	沖縄県	講演	講師	鳥取県立 県民文化会館	福祉相談の窓口から見た 基地問題	国際福祉相談所所長	なし	～基地と平和と文化を考える ～沖縄からのメッセージ事業 報告書
1997年 9月11日	九州地区家庭相談員研 修沖縄大会	沖縄県 九州地区家庭相談 員連絡協議会	講演	講師	那覇東急ホテル	国際化社会に向けての相 談機能のあり方	国際福祉相談所所長	なし	児童福祉法制定50周年記念誌 九州地区家庭相談員研修沖縄 大会記録編
2003年 8月30日	「沖縄県女団協35周年 の歩み 平和・平等・ 発展を燈しつつづけて 〈本編〉」	沖縄県女性団体連 絡協議会	座談会		ている	座談会 第二次婦団協の 時代 あらゆる差別の撤 廃をめざした闘い		桑江アツ子 （元自治労婦人部長） 島本幸子 （第二次婦団協事務局長） 外間米子 （第二次婦団協事務局長） 吉浜政子 （元沖縄県青少年課長） 司会 大城眞代子 （第一次婦団協副会 長、第二次婦団協事務 局長、女団協副会長）	
2018年 12月20日	平成30年度第4回相談 員研修（国籍法と戸籍 法～国籍と戸籍を通し て考える人権～）	おきなわ女性財団	講演	講師	ている 1階ホール	沖縄の無国籍児問題と人権	元国際福祉相談所 ケースワーカー	なし	
2020年 1月30日	「沖縄の文化II」 特別講義	沖縄大学 成定研究室	講演	講演	沖縄大学	沖縄の無国籍児問題と人 権無国籍児問題とその解 決への経過	元国際福祉相談所 ケースワーカー	なし	
2021年 11月16日	平田正代氏を囲んで	おきなわ女性財団			ている			なし	